

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00467

研究課題名（和文）民衆文化としてのロシア修道聖人伝の史的展開に関する研究—ロシア人の死生観への展望

研究課題名（英文）Study on the lives of Russian saint monks as folk culture - Observations on the view of life and death of Russians

研究代表者

三浦 清美 (Miura, Kiyoharu)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：20272750

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍、ロシア・ウクライナ戦争のために十分な文献ならびに遺跡の調査ができなかったために、2020年度より当該テーマにおける研究成果の取りまとめに方向転換を行ってきた。2020年度に『キエフ洞窟修道院聖者列伝』、2021年度に『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』、2022年度に『中世ロシアの聖者伝（一）-モスクワ勃興期編』、2023年度は『中世ロシアの聖者伝（二）-モスクワ確立期編』を出版することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって中世ロシアの聖者伝を考察の対象としたことにより、キリスト教に基づくロシア人の意識の根底にある世界観に光が当てられたことがその学術的意義であると考えられる。ロシアの伝統的な世界観に基づくその統治者観は、2024年2月にはじまったロシア・ウクライナ戦争でも大きな役割を果たしているが、ロシア人の世界観を正確に理解することは、その解決への一助となりうると考えている。こうした草の根の相互理解を少しでも促進させることができたならば、それは社会貢献になりうると考えている。

研究成果の概要（英文）：Due to the coronavirus pandemic and the Russo-Ukrainian war, we were unable to conduct sufficient local research on documents and cultural heritages, so we have changed direction from FY2020 to compiling research results on this theme. "Patericon of Kiev Cave Monastery" in 2020, "Christian Oratory Literature of Medieval Russia (Sermons and Epistles)" in 2021, "Saints of Medieval Russia (Part 1) - Period of the Rise of Moscow" in 2023, "Saints of Medieval Russia (Part 2) - Moscow Establishment Period" in 2023 were published in this research period.

研究分野：Medieval Russian Literature

キーワード：中世ロシア 聖者伝 キリスト教 東方正教 テオーシス アウトクラトル

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究計画調書を執筆したのは、2018年の秋だった。コロナウィルスによるパンデミック、ロシアのウクライナ侵攻によって、世界はまさしく一変してしまった。筆者には、ロシアのキリスト教は西欧のキリスト教とはまったく異なり、ほとんど違う宗教であると捉えたほうがよいという強い問題意識があった。研究計画調書で、筆者は東西キリスト教会の本質の違いとして、以下の4点を挙げていた。ビザンツのキリスト教は、イコノクラスム(聖像破壊運動)の克服をつうじて、キリストは神が人として現れたものであるゆえ像化できると捉え、キリストの人性を重視する(人だから絵に描ける)姿勢を取った。神が人間になった(イエス・キリスト)のだから、人間も神になれるはずだという、東方キリスト教に特有の「神-人間観(テオシス)」と関連するもので、この神-人間観においては、「人間が神になる」存在として、地上における代理者としての「唯一の全能の皇帝」である「アウトクラトル」と、禁欲によって「神に似る преподобный」、あるいは、「神を宿す богоносный」と形容される修道士があり、両者は相互補完的であった。③ビザンツ圏におけるスラヴ人は、典礼の言語がラテン語に統一されていたローマ教会圏とは異なり、ビザンツ帝国の公用語であったギリシア語ではなく、キュリロス、メトディオス兄弟によって創られた古代教会スラヴ語とそれから派生したスラヴ語による典礼が認められていた。権力者から独立した学術機関としての「大学 universitas」が発達した西欧とは異なり、東方正教会には大学は存在せず、学芸を担ったのは権力と親和的な修道院であった。

ロシア・ウクライナ戦争は、自らの宗教的独自性を保とうとするロシアと、異なる宗教の担い手である西欧に接近しようとするウクライナとの文化衝突と捉えることができるので、世界が一変した今になってみるとなおさら、上記の筆者の知見は、世界の変化を的確にとらえるための視点として極めて有効だったのではないかと考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「この世」と超越界の接点に現われた、中世ロシア聖者伝文学に属する様々な物語の分析を通じ、ロシア人の死生観の実態を明らかにすることであった。前述のように、学術機関としての大学が存在しなかったロシアでは、スコラ学で継承発展されるアリストテレス的な、理性に基づく頭脳的な哲学的思考は存在しなかった()。かわりに、キエフ府主教イラリオン(11世紀)、トゥーロフのキリル(12世紀)、ウラジーミルのセラピオン(13世紀)らの説教があるが、それらはすべて、三位一体を規定したニカイア・コンスタンティノーブル信条、キリストを完全なる神にして完全なる人であると定義したカルケドン信条などの教義を、実際の信仰の場に生かすための実践的なものである。中世ロシア人たちは、キリスト教信仰にギリシア・ローマ古典古代の学識は必要とせず、生活における信仰実践こそが肝要であると考えていた。

信仰のために必要な知識の源泉は、新約、旧約聖書であり、同時代のすべての事件の原型は、旧約聖書に記されたヘブライ的な、イスラエル、ユダヤの故事に求められた。旧約聖書に現れる「アブラハム、イサク、ヤコブの神」が、キリスト教の聖三位一体の「父なる神」と捉えられたことは言うまでもないが、ユダヤ的な民族風習を担うそれらは、ベルグソンが『道徳と宗教の二つの源泉』に言う、恐れに基づく民族的な「閉ざされた宗教」が、恩寵に満たされた普遍的な「開かれた宗教」に転換するに際して超克されるべき対象として、同様に民族性をもつスラヴ異教の風習と重ね合わされることも多かった。この捉え方は、ロシア正教会が主導し、ロシア民衆にも浸透した、ロシア独特の旧約聖書観である。このキリスト教観の行きつくところ、ユダヤとスラヴが共通して逢着した、原罪に起因すると見なされた人間の困難のすべてを、新約聖書に描かれたイエス・キリストの救済の行為が解決するという理解の図式が成立することになる。

この伝統を受け継ぎ、独自の伝統を育んだのがロシアの修道院であった。信仰実践の方法を最も具体的に反映するのが、修道院に暮らした優れた修道士たちの暮らしを具体的に活写した聖者

伝文学というジャンルであった。ここでは、文章の論理性よりも物語性が優越し、その物語性によってあるべき信仰のあり方が追求され、説かれた。説教のような神学的な著作ではなく、聖者伝文学こそが、庶民的でありながら当時の人々の精神性を反映した中世ロシア文化の精髓だったといえる。にもかかわらず、現在に至るまで日本や欧米の学界では、聖者伝文学が中世ロシア精神史の重要な所産であるとは見なされてこなかった。重要な文化史的背景をもちながら真剣な検討の対象とはならなかった聖者伝文学に着目し、そこに描かれた、この世と超越界の「境界領域」の諸属性を分析することで、ロシア人の死生観とその変遷を明らかにし、現代に到るロシアの精神性に迫ることを狙ったところに、本研究の目的がある。

3. 研究の方法

筆者が2018年の秋の時点で、紀要等で発表していた中世ロシアの聖者伝は、ロシア最初のキリスト教聖者ボリスとグレープの諸物語(12世紀)、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』(13世紀)、『プスコフのニカンドル伝』(16世紀)であったが、これらの作品の精読から得られた、修道士たちの超自然的な物語を作業仮説的に分類すると以下の通りであった。(A)信仰実践型奇跡譚(聖者に化身した悪魔の誘惑を退ける、異教トーテムである熊を手なづけるなど)(B)労働成果型奇跡譚(悪魔を使役して水汲みをする)(C)復活型奇跡譚(死者が蘇る)(D)救済型奇跡譚(祈りの力による病気治癒、盗賊捕縛、肉欲からの解放、食料確保、遺骸の不腐敗など)(E)予言実現型奇跡譚(悪人の死の予言が実現する)(F)聖母の幻視、(G)聖者(フェオドーシイら)の幻視、(H)天使と悪魔の闘争の幻視。

その時点(2018年)では、日本語への翻訳を通じて精読、詳細の検討に及んでいなかった作品として、以下のものがあつた。荒野修道院の最も典型的な聖者を扱った『ラドネジのセルギイ伝』(14世紀) 修道院の土地所有の正当性をめぐってモスクワ権力とせめぎあつたヴォロコラムのヨシフの修道院の修道士たちの物語である『ヴォロコラムスク聖者列伝』(15世紀) モスクワ大公国の圧迫を逃れて北方に展開したキリル・ベロゼルスキ修道院の開基物語である『ベロオゼロのキリル伝』(15世紀) ソロフキ修道院の開基物語である『ソロフキのゾシマとサバーチイ伝』(16世紀) イワン雷帝の暴虐を諫めたために殉教死した『聖フィリップ伝』(16世紀) 以上である。まずは、中世ロシア語で書かれたこれらの作品の日本語訳、注釈の作成を目指し、研究成果は早稲田大学中世ルネサンス研究所紀要『エクフラシス』、早稲田大学文学部ロシア文学専修コース紀要『ロシア研究』、東京大学スラヴ語スラヴ文学科紀要『Slavistika』などで順次発表することを計画していた。

4、5世紀の教会教父の伝統を継承した、キリスト教文学として捉えると同時に、東スラヴ人の習俗を習合した中世ロシア独自のロシア民衆文化の所産としても捉え、ゼレーニン、アザドフスキ、プロップら20世紀はじめのロシアの民俗学者、フォークロア学者、あるいは、スラヴ民俗学形成期のほぼ同時代のチェコの民俗学者、神話学者ニーデルレ、ポーランドの民俗学者モシンスキ、ブリュクネルらの研究成果を生かした、ロシア、スラヴ民衆文化研究の視点からの分析をも行うことも計画していた。刊行テキストにもとづき研究を遂行するのは当然であるが、モスクワ、サンクトペテルブルグ、ヴェリーキイ・ノヴゴロドなどの図書館、文書館が所蔵する写本に残された、未公刊の聖者伝、説教、異教糾弾文書なども重要な研究対象と定めていた。ロシア科学アカデミーロシア文学研究所(プーシキン館)上級研究員ボプロフ氏、モスクワ高等経済院教授ギッピウス氏、サンクトペテルブルグ大学文学部教授アドニエヴァ氏らとの意見交換も重要な研究作業と考え、レビュー、資料収集のためにロシアに出張したり、彼ら外国人研究者を招聘して公開講演会、合同研究会を開催し、研究成果を点検することを予定していた。

4. 研究成果

2019年度は、9月にサンクトペテルブルグのロシア国民図書館、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所での調査を行い、『ワシーリイ伝』についての文献の収集を行った。10月には、ロシ

ア科学アカデミーロシア文学研究所のポプロフ博士を日本ロシア文学会に招き、プレシンポジウム『ロシア人にとって「正しい」とは何か 中世ロシア書物文化の「黄金時代』』、ワークショップ「中世ロシアの文筆家たちの活動のダイナミズムの諸側面」での報告をしていた。そのほか、12月に細川瑠璃（東京大学大学院博士課程、「2つの世界とその越境 - パーヴェル・フロレンスキイの思想と東方キリスト教」）、渡辺圭（島根県立大学、「20世紀前半のロシア正教会における讃名派駁論」）、三浦清美（早稲田大学、「トゥーロフのキリル（12世紀）の文体的ダイナミズムとそこにあらわれたテオーシス思想」）、井上まどか（清泉女子大学、コメンテータ）の参加を仰ぎ、「ロシア正教思想のダイナミズムの諸相」というシンポジウムを開催した。

ここでコロナウィルスのパンデミックが起こった。海外への研究調査のための旅行、外国人の招聘が困難になったため、研究の方向性を成果の公開に切り替え、松籟社と出版契約を結び、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』（2021）、『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』（2022）、『中世ロシアの聖者伝（一） モスクワ勃興期編』（2023）、『中世ロシアの聖者伝（二） モスクワ確立期編』（2023）の4冊の翻訳書の出版を行った。出版費用の一部を本歌県によって支出した。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』は、13世紀初頭に書かれたウラジーミル・スーズダリ主教シモンとキエフ洞窟修道院の一介の修道士ポリカルプの書簡を核に、15世紀に成立した作品である。1930年にドミートリイ・アブラモヴィチが刊行したテキストが、学問研究の基礎となっているが、翻訳はこのテキストに基づいて行った。ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』に通じる世の不条理に対する神への勇敢な抗議が、この作品を貫く精神性だと考えた。この把握のもとに筆者が書いた解説も、本科研テーマに合致するものである。

『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』は、11世紀から16世紀までの中世ロシアの説教者12人を取りあげ、筆者による日本語訳でその文章を紹介したものである。12人の説教者とは、キエフ府主教イラリオン（11世紀中葉）、キエフ洞窟修道院第2代修道院長フェオドーシイ（11世紀後半）、スモレンスクのクリメント（12世紀中葉）、トゥーロフのキリル（12世紀後半）、ヴィドピツィのミハイル修道院修道院長モイセイ（12世紀末）、ウラジーミルのセラピオン（13世紀後半）、ペロオゼロのキリル（15世紀初頭）、プスコフのパンフィール（16世紀初頭）、プスコフのフィロフェイ（16世紀前半）、ヴォロクのヨシフ（15世紀末から16世紀初頭）、ヴァッシアン・パトリケーエフ（15世紀末から16世紀初頭）、ソラ川のニル（15世紀末から16世紀初頭）である。これらの思想家たちによるロシア思想史の流れを記した解説は、ロシア史の叙述に新しい視座を供するものであると信ずる。

『中世ロシアの聖者伝（一） モスクワ勃興期編』は、モスクワ大公国勃興期の14世紀末から15世紀半ばにかけて書かれた、『ラドネジのセルギイ伝』、『ペルミのステファン伝』、『ペロオゼロのキリル伝』を収める。ルーシでは、聖人伝文学 Агиография/Hagiography と呼ばれるジャンルが飛びぬけた発達を見せたが、聖者伝文学というのは、「聖なる人（聖者、聖人）」の生き方をその生誕から死に到るまで克明に描き、その徳を賛美するもので、そこでは神であり人間であるイエス・キリストの人性が大きなインパクトをもった。食わず、眠らず、異性と交わらず、キリストに倣い肉体の欲求を殺しきった暮らしが、理想として祀り上げられた。それは実践的であり、そのことによって神を見ようという意志において、それは観想的であった。ルーシはビザンツからこうした生き方の理想を受け容れたが、モンゴル勢の襲来によって、いわゆる「ルーシの世界 Русский мир」はほとんど完全に崩壊した。この崩壊のなかで、キエフならびに全ルーシ府主教座（のちのロシア正教会）の保護を買って出たのがモスクワである。ここに収録された作品は、極限の荒廃のなかで輝きを放つ修道士たちの生と彼らとモスクワ権力との距離が描かれている。巻末の解説は、本研究テーマに合致したものである。

『中世ロシアの聖者伝(二) モスクワ確立期編』は、15世紀初めから16世紀中葉にかけて書かれた8つの作品、『悪魔に乗って旅した、ノヴゴロドのイオアンについての物語』、『ローマ人アントーニイ伝』、『ポロフスクのパフヌーチイの死についての物語』、『ペロオゼロのフェラポント伝』、『ペロオゼロのマルチニアン伝』、『ヴォロコラムスク聖者列伝』、『ワラアム修道院についての物語』、『ソロフキのゾシマとサツヴァーチイ伝』を収めている。ここに挙げられた作品は、荒野修道院の理想時代の、(一)に収録された聖者伝の正典性に基きつつ発達し、多種多様で文学的にも面白いが、モスクワ専制確立と表裏一体となった精神の間を抱えている。

荒野修道院運動の理想時代の聖者たちは、北東ルーシの大森林に身を投じ、神に捧げる労働のなかで食うや食わずの生活を送りながら、生活を確立していった。彼らのまえには、未開拓で所有権が問題にならない広大な荒野(大森林)が広がっていた。しかし、彼らが荒野での生活を確立していくと、状況が変わってきた。修道士たちのあとを追い、一般農民が荒野に入って開拓活動に従事すると、森林の所有権という問題が前景化したからである。かつて修道士たちの精神を陶冶した大森林という場合は、欲と欲がぶつかり合う戦場となった。欲と欲のぶつかり合いによるせめぎ合いで重要な役割を果たすのは、ルーシ第2の都市であり、開拓運動を行う修道士たちに対して先行所有権を主張するヴェリーキイ・ノヴゴロドである。修道士たちは、モスクワに対しても、ノヴゴロドに対しても、神に仕える者として導師の役割を果たしていたが、経済主体としての修道院勢力は、14世紀初頭から勃興したモスクワ大公国が順調に勢力を伸ばしてくると、土地の先行所有権を主張するノヴゴロド、ツァーリー統支配を狙うモスクワとの三つ巴の争いに巻き込まれることになった。本書の解説では、修道士が抱える間を上記のような社会状況に求めている。

以上4冊の学術書とともに、ロシア・ウクライナ戦争の歴史的要因を探る書として書肆の求めに応じて書いた『ロシアの思考回路』(松籟社、2022年)も本研究テーマに数えることができる。

研究期間を終えてこうして振り返ってみると、当初は宗教的靈性に焦点を絞って設定された研究テーマが、コロナのパンデミックやロシア・ウクライナ戦争などによって、社会的なものに逸れてしまったという反省がある。特に聖者伝に収められた奇跡譚に現れた靈性というテーマは全く手つかずのまま残されてしまった。

ロシアには「強力な指導者による独裁」という政治文化があり、それは2018年秋の段階で筆者ははっきり認識していたが、2022年2月24日にはじまったロシア軍によるウクライナ侵攻は予見できなかった。東方正教会世界では、天上の神の地上における代理人であるツァーリという統治者観が存在したし、ツァーリの位も、具体的な個人に受肉しなければ機能しないと見なされていた。「善きツァーリ」というロシア民衆の君主観は、この神人一体の神=人間観に基づいている。その根底には、イエス・キリストにおいて神が人間になったのだから、人間も神になることができるというビザンツ東方正教独特の神=人間観(テオーシス)がある。このテオーシスを結節点として、ロシアにおける指導者の独裁という政治文化と、ロシアの修道制は相互補完的に支え合うことに気づいたことが、本研究の出発点であったが、中世のアウトクラトル(天上の神の地上の代理人としての支配者)という思想が、その意匠を変容させて現代に至っているに過ぎないことを、上記の一連の著作の刊行によって、社会に気づかせることにはある程度成功したのではないと思う。

だがその一方で、研究計画調書で謳った、聖者伝の「この世」と「超越界」の境界領域に特化した物語分析を行い、ロシア民衆文化の一部として民俗学的な視点から考察することは、全く手つかずで終わってしまったように思う。別のプロジェクトである三菱財団の「ロシア精神の源流としての北ロシア文化の領域横断的研究 - 文献学、歴史学、宗教学、民俗学の統合の試み」では、共同研究者がこのテーマに取り組んでいて非常に触発されたが、自分としては接点ができたという程度のことしかできていないように思う。期して今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 11
2. 論文標題 聖なる神の御母への冒涇とその具体的内容 プスコフ近郊メリョートヴォ教会壁画と中世ロシアの説教から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 251-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 69
2. 論文標題 「嫌われ者」を通して見る宗教戦争としてのスムータ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 355-373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 10
2. 論文標題 アキル＝アヒカル物語群（中近東、スラヴ地域）と棄老伝説難題型（東アジア、インド）の一致をめぐる考察 物語の構造分析から歴史へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 191-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 68
2. 論文標題 ロシア、反乱の世紀における中庸の指導者 ツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィチの場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 327-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 13
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XXVI) ラドネジのセルギイ伝 (2)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 36-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 1
2. 論文標題 皇帝 (ツァーリ) - ロシアの特徴的な統治システム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沼野充義ほか『ロシア文化55のキーワード』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 .	4. 巻 20
2. 論文標題 "	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 .	6. 最初と最後の頁 145-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 1
2. 論文標題 溶解する「死と生の境界」と国をめぐる歴史認識の変容 - 『ヴォロコラムスク聖者列伝』の幻視	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 甚野尚志『疫病・終末・再生』知泉書館	6. 最初と最後の頁 291-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 53
2. 論文標題 " " : , 2020, 488 .	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア語ロシア文学	6. 最初と最後の頁 124-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 21
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館(XXIV) - ワッシアン・ルイロのウグラ川への書簡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ロシア文化研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 12
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館(XXV) - ウグラ川での対峙の物語	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 8
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XX) 佯狂者アンドレイ伝 (完結) 曆聖者伝10月1日ポクロフについての講話	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 301-312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 66
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XXI) 府主教フィリップ伝 (下)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 421-436
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 11
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XXII) 中世ロシアの説教 、アポクリファ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 125-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 25
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XVIII) アポクリファ 、幻視の文学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代ロシア研究	6. 最初と最後の頁 45-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 20
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XXIII) ノヴゴロド点景そのほか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア文化研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 第65輯
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XVII) 府主教フィリップ伝(上) - 翻訳と注釈	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 311-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 7
2. 論文標題 「中世ロシア文学図書館 (XVI) 佯狂者アンドレイ伝-翻訳と解題」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 301 - 314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦清美	4. 巻 10
2. 論文標題 中世ロシア文学図書館 (XIX) ラドネジのセルギイ伝-翻訳と解題(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 79-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 三浦清美
2. 発表標題 時代を写す鏡としての寓話作品『ステファニテスとイクネラテス』 - 東方正教会世界における「奸智」
3. 学会等名 日本ビザンツ学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 三浦清美
2. 発表標題 聖なる神の御母を冒瀆する者たちとその具体的内容 - プスコフ近郊メリョートヴォ教会壁画とスモレンスク人クリメントの説教から
3. 学会等名 日本ビザンツ学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三浦清美
2. 発表標題 ソビエト、ロシアのビザンツ学者、セルゲイ・セルゲーヴィチ・アヴェリンツェフの仕事 - ビザンツの文明史的な位置づけと『初期ビザンツ文学の詩学』（モスクワ、1977）
3. 学会等名 日本ビザンツ学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名
2. 発表標題 : . 27. 10. 2019.
3. 学会等名 日本ロシア文学会69回全国大会、 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 529
3. 書名 中世ロシアの聖者伝(二) - モスクワ確立期編	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 318
3. 書名 「[第2講]キエフ・ルーシーロシアとウクライナの分岐点」 黛秋津編 『講義ウクライナの歴史』	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 講談社現代新書	5. 総ページ数 271
3. 書名 「ロシア正教 なぜツァーリは絶対的な力を持つのか」 古市憲寿 『謎とき世界の宗教・神話』	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 469
3. 書名 中世ロシアの聖者伝(一) - モスクワ勃興期編	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ロシアの思考回路	5. 総ページ数 296
3. 書名 扶桑社	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 507
3. 書名 中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 468
3. 書名 「中世ロシアの精神史における古儀式派」阪本秀昭・中澤敦夫『ロシア正教古儀式派の歴史と文化』	

1. 著者名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 :	5. 総ページ数 656
3. 書名 " (:)"	

1. 著者名 三浦清美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 443
3. 書名 キエフ洞窟修道院聖者列伝	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------